

### 白人娘たちの「物語記憶」：ミンローズ・グイン、キャスリン・ストケット、ハーパー・リーと公民権運動

利根川, 真紀 / TONEGAWA, Maki

---

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

91

(発行年 / Year)

2018-01-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014332>

## 白人娘たちの「物語記憶」

— ミンローズ・グイン, キャスリン・ストケット,  
ハーバー・リーと公民権運動

利根川 真 紀

### はじめに

ミシシッピ州で生まれ育った Minrose Gwin (1945-) は、2010 年出版のデビュー作 *The Queen of Palmyra* において、公民権運動の人種的緊張が高まる 1963 年に焦点を当て、州都ジャクソン近郊にある架空の町 Millwood を舞台に、白人地区と黒人地区を行き来する 10 歳の白人少女の日常を描いた。同じく 1963 年のミシシッピを舞台とする小説として、その前年に出版された Kathryn Stockett (1969-) のデビュー作 *The Help* があるが、ベストセラーになったこの作品では、大学を卒業して故郷に戻った白人女性を中心にしつつ、州都ジャクソンの白人家庭で働く黒人家政婦たちの苦勞が語られる。公民権運動から半世紀ほどが経過した時点で出版されたこれら 2 作は、いずれも白人女性作家たちの自伝的要素を含み、自らの子供時代を回想する形で執筆されている。公民権運動の余波が、白人娘の視点から、極めて個人的な領域である家族の問題として捉えられていることが特徴的であるが、これは人種隔離政策下の白人娘にとって、人種問題はなによりも白人家庭で働く黒人家政婦を通して実感されるものだったからだろう。

さらに、『パルミラの女王』の白人少女の日常の光景は、1 人称の少女の語りを中心としつつも、大人になってからの回想の語りも加わり、これら 2 重の声によってつまびらかにされている。作品内におけるこのような記憶の使われ方は、1960 年に出版されてピューリッツァー賞を受賞した Harper Lee (1926-2016) のデビュー作 *To Kill a Mockingbird* と比較検討することが有効であろう。2015 年出版のリーの *Go Set a Watchman* は、ベストセラーとなった前作

の続編と前宣伝されて大いに出版界を賑わしたが、正確には前作の前身だったと考えられ、『さあ、見張りを立てよ』と併せ読むことにより、『モッキングバードを殺すこと』の回想形式の1人称の語りはまた違った様相を呈しはじめる。

『パルミラの女王』についての本格的な論考はまだ存在しないものの、出版当初から、それが扱うテーマや採用している語りの声という点において、『ヘルプ』や『モッキングバードを殺すこと』と比較言及されることが多かった<sup>(1)</sup>。本稿では、これらの作品との比較を織り交ぜつつ、『パルミラの女王』において公民権運動が、白人娘の記憶を通して描かれることにより、いかに永続的で根本的な変容を個人に突きつけたのかを検討する。第1節では、黒人家政婦に育てられた子供時代の経験が、作家たちが小説を執筆する契機として機能している様子を明らかにし、第2節、第3節では、各作品において公民権運動をめぐるせめぎ合いが家族を変容させていく様子を迎える。そのうえで第4節では、人種隔離社会を描くにあたり、『パルミラの女王』が記憶という装置を必要とした理由とその効果を考察したい。

## 1. 子供時代の黒人家政婦がもたらしたもの

3人の作家は人種隔離政策下の深南部で育つが、いずれの子供時代にも黒人家政婦の姿が身近にあり、彼女たちを通して自らの白人社会を相対化する視点に触れていたといえる。ゲインの『パルミラの女王』は、献辞に“In memory of Eva Lee Miller, 1910-1968”とあり、母方の祖父母の家で雇われていた黒人家政婦に捧げられている。この小説出版の6年前にゲインは、精神的病を抱えて他界した母についてのメモワール *Wishing for Snow* (2004) を出版しているが、その中でもエヴァ・リー・ミラーについてのエピソードが数多く語られており、その多くが『パルミラの女王』において、10歳の白人少女 Florence Forrest の祖父母の屋敷で働く黒人家政婦 Zenie Johnson (本名 Zenobia Lee Johnson) の経験として用いられることになる<sup>(2)</sup>。

58年の生涯のほぼ半分をこの屋敷で家政婦として働いたエヴァは、追加の支払いなしに時間外に黒人地区の自宅で、雇用主の孫娘ゲインの子守りまで任されることが多く、その不満をゲインに対して隠すことがなかった (*Wishing* 126, 51) — “Sometimes Eva would take one long hard look at me and say she was sick and tired of little white girls messing with her stuff, enough

was enough, and she would send me home.” (68)。ゲインはそれでも、母のぬくもりよりもエヴァや祖父母を身近に感じながら育つことになったが、その理由は、生まれて1年ほどで実の父が姿を消し、6歳で母が再婚するまで、ゲインと母は祖父母の屋敷に身を寄せていたからでもあった。

I remember that my grandmother’s hands smelled of glycerin and rose water and chalk. I remember hugging Eva’s tree-trunk legs with their bandages and running sores and her rough, mostly friendly hand on my head. I know my grandfather’s bones were sharp at the pelvis.

I do not remember my mother’s arms around me or her touch on my face. I do not remember her own true smell or the texture of her flesh. Whether this is a failure of memory or of imagination, I do not know. (89–90)

週に1度は母から折檻を受けていたゲインに対して、エヴァがさりげなく緩衝材となり、支えとなってくれたことも語られている——“During the day, Eva told me not to pay any attention to Mama, life was not easy, take one day at a time, try not to aggravate my mother, stay in the kitchen out of people’s way.” (67)。白人だから、子供だからという理由で無条件に愛情を注がれることはなかったものの、不安定で孤独なゲインの子供時代に、エヴァは精神的に頼れる大きな存在だったことがわかる。

ゲインが大学生になり地元を離れても手紙のやりとりは続き<sup>(3)</sup>、卒業後にジャーナリズムの道に進み、公民権運動の取材でアトランタにいた時に、彼女はエヴァの訃報に接することになった (126)。ゲインはその後大学院に戻って文学を学ぶことになるが、やがて1冊目の研究書として出版されることになる博士論文のタイトルは、*Black and White Women of the Old South: The Peculiar Sisterhood in American Literature* (1985) だった。この著書で扱われているのは、ウィラ・キャザーの『サフィーラと奴隷娘』やウィリアム・フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』などのアメリカ南部文学に見られる “white blindness and black pain and in rare instances cross-racial sisterhood” (*Black and White Women* 16) であり、文学研究者としても当初から、人種

の壁と女性の絆という自らの幼少期の体験にゲインが向き合っていたことがわかる。

彼女より24年後にミシシッピ州に生まれたキャスリン・ストケットの子供時代にも、黒人家政婦の姿があり、Demetrie McLorn (1927-1985) は1955年から料理と掃除をしにストケットの家に通ってきていた (Stockett, “Too” 447)。6歳で両親の離婚を経験した末っ子のストケットは、幼少期に母の不在の寂しさを体験するが、そんな彼女にとってとりわけ精神的支柱となったのがデメトリであり、デメトリを念頭に置いて書かれたのが『ヘルプ』だったと、ストケットはあとがきに記している。

I'm pretty sure I can say that no one in my family ever asked Demetrie what it felt like to be black in Mississippi, working for our white family. . . .

I have wished, for many years, that I'd been old enough and thoughtful enough to ask Demetrie that question. She died when I was sixteen. I've spent years imagining what her answer would be. And that is why I wrote this book. (“Too” 451)

他方、ストケットよりも半世紀近く前にアラバマ州で生まれ育ったハーパー・リーの場合、母親が双極性障害に似た精神的不調を抱えていたため (Shields 39-40)、近くの黒人地区から Hattie Belle Clausell が毎日家に通い、掃除や料理を代わりにこなしていたという (41)。この黒人家政婦についてこれ以上に詳しい情報はないが、のちに小説『モッキングバードを殺すこと』および『さあ、見張りを立てよ』に登場する家政婦 Calpurnia のモデルになったと考えられる。しかも、実際には母はリーが25歳まで存命だったにもかかわらず、これらの小説においては、主人公の白人少女 Scout こと Jean Louise の母を2歳の時に死亡した設定にあえてすることにより、リーはこの白人娘の人格形成における黒人家政婦カルパーニアの重要性を強調している。

このように、3人の女性作家に共通してみられるのは、幼少期に実の母との心理的距離があったために不安定な子供時代を過ごすことになったが、その精神的支えとなったのが黒人家政婦だったことである。人種隔離政策期の南部にも関わらず、最も親密な関係を使用人だった彼女たちとのあいだに築くことに

よって、多感な時期に白人社会とは異なる価値観に触れることになり、それが後に、彼女たちの姿を小説に描くことを通して作者自らのアイデンティティを模索する試みにも繋がったと考えられる。次節以降、個々の作品にその具体的な反映を辿ることとする。

## 2. 人種意識による白人家族の崩壊

### —『さあ、見張りを立てよ』と『ヘルプ』の場合—

3人の作家はいずれも、1950年代から60年代にかけての公民権運動の高まりを背景に物語を展開しているため、白人登場人物たちは人種意識をいやがうえにも問われ、黒人たちとの関係だけでなく、ひいては親子・家族関係についても認識の変化を余儀なくされていく。ハーバー・リーの『さあ、見張りを立てよ』に描かれるのは1950年代中頃のアラバマ州の架空の町 Maycomb であり、『モッキングバードを殺すこと』の最後で8歳だったスカウトことジーン・ルイズは26歳になり、ニューヨークから故郷の町に恒例の一時帰省をする。黒人の公民権をめぐる南部では激しい攻防が続いており、教育機関での人種隔離政策を違憲とするブラウン判決、アラバマ州のバスボイコット運動やミシシッピ州のエメット・ティル少年殺害事件、またアラバマ大学への黒人女子学生の入学阻止事件が起きている (Lee, *Go* 24, 175)<sup>(4)</sup>。黒人女性と白人男性の2人の手によって育てられたことを自認するジーン・ルイズは (179), “color blind” (122, 270) に育っただけに、この夏の体験は彼女の根幹を揺るがすものとなる。

この帰郷により、尊敬する父 Atticus が40年前にはKKKのメンバーだったこともあり (229-30)、また今では Citizens' Council (白人市民協議会) の “the board of directors” を務めていることを知り (103-04)、その集会の様子を目撃したジーン・ルイズは驚愕する。「白人市民協議会」とは白人至上主義の団体であり、1954年にミシシッピ州で結成されてミシシッピとアラバマ両州に蔓延し、中流階級を中心に支持を得て、「(ある歴史学者の表現を借用するなら)『地元名士会の顔をしながら、KKKの綱領』を実践しようとしていた」組織である (パターンソン 140-41)<sup>(5)</sup>。父アティカスは連邦政府や NAACP (全米黒人地位向上協会) のやり方に反発して、自分たちの町に即した人種問題解決の方法を模索するためにこの組織に加わっていると主張する

(Lee, *Go* 238)。ジーン・ルイズには父が、白人女性に暴行した嫌疑をかけられた黒人を裁判で弁護した頃の、つまり『モッキングバードを殺すこと』時代の父とは、別人のように感じられ、そんな父親を生理的に受け止められずに嘔吐してしまう。

ジーン・ルイズを育てたもう片方の存在、黒人家政婦カルパーニアも、やはり昔とは変わってしまっている。高齢のため半年前に家政婦の仕事を引退しているが、彼女の孫息子が自動車事故で白人を轢き殺してしまったことを知ると、心配したジーン・ルイズは彼女を見舞うために黒人地区の家に足を運ぶ。カルパーニアはジーン・ルイズの家で働いていた時には、彼女たちとは標準語で会話し、客の前でのみわざと“erratic grammar” (159) を使うようにしていた。今回の訪問で、育ての親と慕うカルパーニアから初めて非文法的な英語で話しかけられ、他人行儀な態度を見せられたジーン・ルイズは、激しく動揺する。

“Cal,” she cried, “Cal, Cal, Cal, what are you doing to me? What’s the matter? I’m your baby, have you forgotten me? Why are you shutting me out? What are you doing to me?” (159)

これに対してカルパーニアは“*What are you all doing to us?*” (160) と逆に問いかけ、ジーン・ルイズを個人としてではなく“*white folks*” (161) としてしか認識していない様子を示す。すべてが人種問題に還元されてしまうのを目の当たりにし、26年間の自分の人生がすべて否定されたように感じるジーン・ルイズは、必死の思いでカルパーニアの答えにすがる。

Jean Louise rose to go. “Tell me one thing, Cal,” she said, “just one thing before I go—please, I’ve got to know. Did you hate us?”

The old woman sat silent, bearing the burden of her years. Jean Louise waited.

Finally, Calpurnia shook her head. (160)

公民権運動によって露呈する人種隔離社会の矛盾の板挟みになり、白人娘は最愛の父からも黒人家政婦からも、それまでの信条を否定されて行き場を失い、

アイデンティティの危機に見舞われる。

一方、1963年のミシシッピを舞台とする『ヘルプ』と『パルミラの女王』においては、公民権運動をめぐる攻防は一層激しさを増しており、州都ジャクソンでNAACP州支部代表を務める黒人活動家 Medgar Evers が暗殺されると、そのニュースが黒人地区を震撼させる様子が描かれている。これほどの立場で活躍する人が暗殺されたことはなく、公民権運動絡みの暴力が新たな段階に入ったことを告げる事件だった (Gwin, *Remembering* 11)。メドガー・エヴァーズはいつも通り夕刻に静かな住宅地にある我が家に帰宅し、車から荷物を運び出しているところを物陰から射殺され、妊娠中の妻と子供たちが血まみれのエヴァーズに駆け寄ったことが伝えられており、それは “Americans' purported belief in the sanctity of home and family” を脅かす事件でもあったという (5, 11-12)。『ヘルプ』も『パルミラの女王』も、興味深いことに、エヴァーズの暗殺という公民権運動への攻撃を、あえて家族の問題として捉え返そうとしていると考えられる。

『ヘルプ』においては、白人の家に通う黒人家政婦たちは、黒人地区の自宅に戻ったところでこのニュースをラジオで知ることになる。車で5分ほどの距離に住み、教会でもエヴァーズの家族と面識のあった彼女たちは、“KKK shot him. Front a his house. A hour ago.” (Stokett, *Help* 194), “Shot him right in front a his *children*, Aibileen.” (195) と驚きを語る。事件現場周辺が銃をもった白人によって封鎖される中、黒人女性エイビリーンは自らが包囲され、銃を突きつけられているかのように感じる。こうした人種的緊張の高まりを背景に、主人公の白人女性 Skeeter 自身が直面しなければならない課題は、自らの家族の人種差別意識に向き合うことである。大学を卒業して故郷に戻ると、文通を続けて再会を心待ちにしていた最愛の黒人家政婦 Constantine が、屋敷から姿を消していることを知り、一人娘のスキーターは母との対立を避け続けるが、最後には覚悟を決めてその理由を母に問い詰める。

知り合いの黒人家政婦から知ることができたのは、コンスタンティンには25年ほど前に娘が生まれたが、生計を立てるためにスキーターの家で家政婦の仕事をするしかなく、またコンスタンティンの父の隔世遺伝ゆえに白い肌の黒人として生まれた娘は、人種隔離政策下の南部では居場所もないので、コンスタンティンは娘を北部に手放さざるをえなかったということだった。スキーターはこの事実を知ると、“Constantine's love for me began with missing

her own child” (360) とコンスタンティンが抱えていた苦悩に初めて気づき、彼女の愛情を独り占めしていた自分の子供時代が違った光のもとに見えてくる。一方で、スキーターが大学で故郷を離れているあいだに、コンスタンティンの娘 Lulabelle が、初めて生みの母を訪ねて南部にやってくる。北部で成長して “some under the ground group” (363) の活動もしていたらしいルラベルは、白人のふりをして、スキーターの母が自宅で開催していた DAR (米国愛国婦人協会) のパーティに潜入して会員登録をしようとし、強い人種差別意識をもつスキーターの母を刺激する。激怒したスキーターの母は、コンスタンティンがルラベルを手放した理由を、“She gave you up because you were too high yellow. She didn’t want you.” (364) と告げ、母が病気ゆえに自分を育てられなかったのだと信じ込んでいたルラベルの幻想を破き、この黒人の母娘の絆を引き裂いてしまうことになる。住むところも職も失い、コンスタンティンが北部で3週間後に命を引き取ったことをスキーターはやがて母から聞かされることになる。

我が子のスキーターに向かって “You idolize Constantine too much. You always have.” (364) と言い放つ母は、自分の娘が黒人家政婦のほうになついていることにずっと嫉妬していたがために、こうした行動に出てしまったのかもしれない、ここにもまた人種隔離政策下での黒人と白人の2人の母親体制の歪みが噴出している。スキーターは最終的に、胃癌で余命の限られた母を見捨ててニューヨークに発つ。白人上流社会のジェンダー規範や人種規範を強要する母に対して、スキーターが最後に決別する勇気を持てたのは、エヴァーズ暗殺事件に怯えながらも、周囲にいる何人もの黒人家政婦たちから白人の家で働く体験についての聞き取りを続け、1冊の本をまとめあげるといふ地道な交流を通して、白人家族を相対化する視点を獲得したことによるだろう。この爽快な結末に対しては、やや安易にすぎるとみる向きもあるが、それこそがベストセラーになった所以ともいえそうだ。

### 3. 人種意識による白人家族の崩壊 — 『パルミラの女王』の場合 —

1963年6月12日にメドガー・エヴァーズを暗殺した「白人市民協議会」メンバー Byron De La Beckwith は、その後白人男性だけからなる陪審団によって2度も評決不能となり、有罪判決が下されるまでには30年ほどの時間を要

した。ミンローズ・グインはエヴァーズが文学や音楽やジャーナリズムにおいていかに記憶・表象されているかを考察し、10年ほどの年月をかけて研究書 *Remembering Medgar Evers: Writing the Long Civil Rights Movement* (2013) を完成するが<sup>(6)</sup>、小説『パルミラの女王』はこの事件を調査する中から生まれたものだと言っている (*Remembering* 173, 167, 168)。実際、主人公の父で「白人市民協議会」およびKKKのメンバーである Win Forrest は、“a working-class version of Byron De La Beckwith” (169) として設定したといい、作中で彼はメドガー・エヴァーズ暗殺当日にはあたかも殺害に関与してきたかのような怪しい行動も見せている (*Queen* 284)。また、エヴァーズと共に活動することもあった、トゥガルー大学の学生だった Anne Moody (1940-2015) は、人種隔離の南部に黒人女性として生きた半生を綴った自伝 *Coming of Age in Mississippi* (1968) を出版したことで有名だが、グインの小説に登場する若い黒人女子大生 Eva Greene はアン・ムーディをモデルにしているという (*Remembering* 169)。

『パルミラの女王』においても、メドガー・エヴァーズの暗殺に対する黒人たちの深い悲しみと動揺が描かれるが、“You haven't heard? They shot Medgar Evers tonight. In his own front yard, with his little children in the house. He's gone.” (*Queen* 291) と伝えられる事件の概容は、ここでもやはり家族に及ぼす側面が強調されている。『さあ、見張りを立てよ』と『ヘルプ』の白人女性主人公が20代中頃だったのに対して、『パルミラの女王』の主人公 Florence Forrest は10歳の無防備な少女であるため、公民権運動の軋轢は彼女を余すところなく翻弄することになる。この年、少しでもましな職に就こうと、父は妻と娘を引き連れて南部一帯を1,2ヵ月ごとに落ち着きなく移動する生活を続けてきたが、一家は結局、母方の祖父母の屋敷の近所に舞い戻る。このため、小学校4年生のフロレンスはほとんど学校に通うこともできず、友達もいない。父は鬱憤を晴らすために地元の白人至上主義の活動にのめり込み、そんな夫に反発する母は、夫の活動情報を密かに通報し続けて黒人たちを守ろうとするが、精神的ストレスからか列車に車で突っ込んでしまい、夫に精神病院に入院させられたため、娘は母からも見捨てられてしまう。もともと階級の違いを理由に、両親から反対された結婚だったが、人種意識の違いから夫婦の生活は破綻し、一人娘のフロレンスは両親の板挟みになり、安心できる居場所としての家族を失っている。父の暴力は自らがコントロールできない

ものに対して向けられるが、次節で見るように、やがて娘もその標的にされていく。

同年代の友達もできず、自宅と祖父母の屋敷と黒人地区にある黒人家政婦の家をたらい回しにされるフロレンスは、一方で、人種隔離政策下の南部で、白人社会と黒人社会との境を越えて行き来することのできる稀有な存在としても描かれている。フロレンスと黒人家政婦ゼニー・ジョンソンとの関係は、フロレンスの母が自分の両親の屋敷で働くゼニーに対して、娘の子守りを頼んだ5年前に始まる。以下、文中の Mimi とはフロレンスの祖母である。

Back then I was little; somebody had to keep me. Zenie had kept my mother while Mimi taught social studies at the high school. Why not me?

“I want Florence to love you like I do. I want her to *know* you. Really *know* you, the way I do.” That was the way Mama put it to Zenie. . . .

Zenie cleared her throat and said loud enough for me to hear, “They all trouble.”

“Zenie, I don’t want to make you do this if you don’t want to. You know I’ll pay you fair.” Mama whispered this last sentence like it was a shameful secret. (53)

あくまでも賃金で雇用される契約関係においてはああるものの、フロレンスはこうして、ゼニーが夫 Ray と高齢の母と暮らす黒人地区の家をしばしば訪れるようになり、白人のために働いていない時のゼニーを知るという貴重な体験もすることになる。

When I’d wake up from my naps on Zenie’s couch and hear Ray and Zenie talking, I liked to keep my eyes shut and just listen. When my Mama and Daddy talked, it was like little hummingbirds fighting over a piece of the yard. Fast and hungry. Where’s supper and how long and are you going out tonight and who called and what kind of cake did they want.

The way Zenie and Ray talked when they thought I was asleep made me see butterflies in my head. It wasn't the words, it was the way they had of flitting back and forth and finally lining up just so. Touch and then touch again. Melting the lines Zenie's and Ray's sentences made. (106-07)

両親という時には得られない夫婦の信頼感と家庭の温かみを、フロレンスはゼニーの家で知る。それだけでなく、黒人同士が互いに目配せしたり小声で話したりする様子を目撃することによって、彼らが自分に聞かれたくない秘密もっていること、自分が迷惑な闖入者であり、時には加害者として忌み嫌われていることも意識するようになる (243-244)。

ゼニーの家に、姪のエヴァ・グリーンが夏休みの学費稼ぎのアルバイトとして黒人相手に保険を売ろうと滞在しにやってくると、この教員志望で自信に満ちた黒人女子大生に、フロレンスはすっかり夢中になる。フロレンスは母から、きちんとした名前をつけたのだから、誰にも“Flo”などと呼ばせてはいけないと教え込まれていたが (47)、彼女はエヴァに「フロー」と呼ばれると、“the O sound of it in Eva's mouth gave me a strange pleasure” (75) と感じ、やがて彼女は母の禁止を乗り越えて、自らをフローと名乗るようになる (312, 360)。精神的支えを、母からエヴァやゼニーたち黒人女性に移すことによって、フロレンスは自分なりのやり方で、人種的緊張の高まる南部の子供時代を生き延びていこうとするのである。そして、中学校教員志望のエヴァがその夏、新学期開始を前に1年間の遅れを気にしていたフロレンスに教えてくれた最も重要なレッスンが“diagramming”をめぐるものだった。『パルミラの女王』の記憶の語りとこのレッスンがいかに結びつくのか、次節でさらに検討してみたい。

#### 4. 人種隔離政策と記憶の力

語られかたに注目すると、『モッキングバードを殺すこと』と『パルミラの女王』はいずれも、子供の声と大人になってから子供時代を回想する声という2重の声によって小説が構成されている。しかしそこから生じる印象は異なり、前者は失われた古き良き時代へのノスタルジーが色濃く、後者は失われた子供

時代へのノスタルジーもありながら、さらに自らの罪を遅ればせながら認めることで、人種隔離政策下の語り手の成長、そこにおける記憶の困難さと意義を印象づけるものになっている。

『モッキングバードを殺すこと』では、白人少女スカウトの6歳から8歳にかけての出来事が、彼女の1人称の声で臨場感をもって語られている。しかし時に、成長して大人になったスカウトからしか得られない語り混ざり、早くからその文体や内容に関して一貫性のなさが指摘されてきた (Going 61; Fine 67; Shields 127-28)。この声の不安定さについては、『モッキングバードを殺すこと』と『さあ、見張りを立てよ』の創作プロセスを整理すると見えてくることがあると、Charles J. Shields が2006年出版の伝記の中で指摘している<sup>(7)</sup>。

It might be that Lee floundered when she was trying to settle on a point of view. She rewrote the novel three times: the original draft was in the third person, then she changed to the first person and later rewrote the final draft, which blended the two narrators, Janus-like, looking forward and back at the same time. (128)

ここで言及されている3度の書き直しとは、1957年1月から2月にかけてハーバー・リーがエージェントに渡した *Go Set a Watchman* と題する原稿、その後エージェントの助言をもとに手を入れて1957年5月にタイトルを *Atticus* に変更して出版社に渡した原稿、その後2年間にわたり編集者 Tay Hohoff とともに手を加えて1960年に *To Kill a Mockingbird* のタイトルで出版した書籍に (Shields 114-16, 126-32)、それぞれ対応すると考えられる。Katherine Henninger は、2015年出版の『さあ、見張りを立てよ』が、上記の第1段階のものか、第2段階のものか、あるいはそのどちらでもないかについては判明していないとしながらも、2015年出版本が1960年出版本の初期段階の草稿にあたることは間違いないとしている (Henninger 623, n3, n4)<sup>(8)</sup>。

以上のような創作の経緯を踏まえると、奇妙に思えてくるのは、『モッキングバードを殺すこと』の2重の声のうち、大人になったジーン・ルイズの声を取り巻く不自然な沈黙である。

Exactly when and from where the adult Scout offers her adult

perspective is not specified in [*To Kill a Mockingbird*], although she would necessarily be speaking no earlier than the late 1940s and no later than 1960. (Henninger 623, n5)

1950年代の現在から語っているということになれば、語り手を取り巻く当時の状況として、公民権運動をめぐる緊迫の度合いは増しているはずだが、その状況については作中で一言も言及がないのである。『モッキングバードを殺すこと』が、人種問題絡みの裁判にアティカスがかかわる様子を取り上げていることを考えると、この沈黙は一層不可解だ<sup>9)</sup>。1950年代の人種状況が作中で示唆されないことによって、草稿段階ですでに書き込まれていた白人至上主義の団体に所属する父アティカスの姿はその片鱗も示されないことになり、結果として、スカウトの子供時代の理想の父親像としてのアティカスが強調され、彼女の保護された子供時代は憧憬の対象としてノスタルジーの世界となっている。1960年出版当時に『モッキングバードを殺すこと』を読んだ大勢の読者は、周囲の公民権運動の攻防をめぐる喧騒を忘れて、古き良き時代に慰めを見出したのかもしれない。

一方、『パルミラの女王』の回想の視点は、42年後の2005年8月にニューオーリンズで暮らすフローことフロレンスのものであることが、小説の最後の章であるパートVの19章から明らかになる (*Queen* 380)。この小説は全体が5部構成になっており、パートI (1章～7章)、パートII (8章～13章)、パートIII (14章～17章)はクロノジカルに進み、1963年の春から夏にかけて、フロレンスが10歳の時の出来事が語られている。パートV (19章)はフロレンスが祖母に連れられて、暴力的な父のもとから着の身着のままに逃れ、ルイジアナ州ニューオーリンズに到着後、その地で彼女が52歳になるまでの様子が描かれている。小説の以上の部分はフロレンスの、子供の1人称の語りと大人になってからの回想の語りという2重の声によって語られているのだが、不思議なことにパートIV (18章)だけは3ページと非常に短く、なんの前置きもなく唐突に、フロレンスではない人物の語りになっている。物語の他の部分とは異質なこの章では、黒人女性エヴァ・グリーン<sup>10)</sup>の殺害の顛末が、殺されるエヴァの1人称の視点から語られており、内容的には直前の17章でフロレンスの視点から語られていた出来事を、当事者の視点から語り直す趣向となっているのである。

フロレンスの父であり白人至上主義の信奉者であるウィンは、仲間とともに、この夏親戚を頼ってやってきたエヴァが、黒人に保険を売ることで白人の仕事脅かしたとして、彼女の頬に火を押し付けるなどし (123), 暴行を加えたのち白人墓地に放置するという野蛮な「見せしめ」をおこなっていた (6章)。エヴァも周囲の人々も犯人が誰か気づいているが (363-64; 144), フロレンスだけは気づかず、父とエヴァのあいだを無邪気に行き来する。姿を消してしまった母のために精一杯できることをしようと無理をして、フロレンスは台所を火の海にしてしまうが、その夜遅く帰宅した父に、懲らしめと称して腕にライターの火を押しつけられる (8章)。“I was squinching up something bigger than my eyes. Only this time it worked. You can't see what you don't remember.” (177) と、フロレンスにとっては、次にもう片方の腕にもライターを押しつけられた記憶が残らないほどのトラウマとなる。やがて生じるエヴァに対する2度目の暴行シーン、つまり殺人が、先に指摘したように2種類の視点で語られる (17章, 18章)。その後、親を馬鹿にしたとして左腕を父から脱臼させられたフロレンスは (16章)、脱臼した腕を振り上げられ、車の後部座席から目撃した出来事を黙っていないとおまえを殺すと父から脅され、限界状況に追い詰められる (17章)。死の恐怖から、フロレンスは目撃した出来事を意識下へ抑圧してしまう。

その結果、フロレンスが目撃した内容として語る17章の出来事は、18章のエヴァの視点からの殺害の語りの内容と矛盾しており、小説最後の19章での記述により、ようやく真相が判明することになる。フロレンスは10歳の時には、車の後部座席から埃だらけの窓を通して、父がどこかの黒人女性に何かをしている様子が見えたが、何が起きているか理解することはなかった (17章)。だが、42年後にこの場面がフロレンスの脳裏に突如甦る時、被害女性がエヴァ・グリーンであったこと、また “Our eyes lock. She nods at me, an odd sort of nod to the left: a slow-motion curtsy.” (380) と、エヴァの目がしっかり自分を見つめていたことを初めて認識することになる (19章)。

How he did that thing I couldn't see, didn't see. A willed, necessary blindness.

True stories happen, and then you tell them. But what you tell depends on what you see. And what you see depends on what you

know. (381)

それほど重要な事件を忘れてしまっていたなんて不可能だと言う母に対して、フロレンスは “It’s not that I didn’t remember what I saw. It’s that I didn’t know what I was seeing.” (384) と答える。この作品の執筆中のタイトルは、一時 “What I Didn’t See” だったと作者はインタビューで語っており (Eason; “Q and A”), 危機的瞬間に生じる忘却がこの作品の重要なテーマになっていることを告げている。

この種の忘却については、トラウマ理論の知見が参考になるだろう。ヴァン・デア・コークとヴァン・デア・ハートによれば, “Lack of proper integration of intensely emotionally arousing experiences into the memory system results in dissociation and the formation of traumatic memories.” (van der Kolk and van der Hart 163) であり, 「トラウマ記憶 (“traumatic memory”)」が語り手の記憶の中で統合されるためには, 「物語記憶 (“narrative memory”)」に転換される必要があるという。死の恐怖に怯える限界状況にあったフロレンスにとって, 父によるエヴァ殺害は「トラウマ記憶」となり, 自分の意識に統合されない形で 42 年間隔離され続けてきた。しかし, その隔離された記憶が一方で忘却を拒んでいたことは, 一貫性を欠いてまで挿入されているエヴァの 1 人称の語りで構成される 18 章の存在によっても示唆されており, またこの間ずっとフロレンスを悩ませてきた “flutter” の存在によっても裏付けられる (*Queen* 370, 371, 376, 377)。

Mostly, though, I tried to ignore it as best I could, though as time went on, the flutter wore on me, the way a recurring dream you can’t remember but can’t forget either wears on you. You have to either forget it or remember it; otherwise it will spin a web around you and never let you go. (371)

父の元から逃げてきたニューオーリンズで, フロレンスが 42 年前に通った小学校も, 2005 年には人種統合もだいふ進み, 今では多くの黒人の生徒も白人の生徒と机を並べている。殺害場面の目撃を抑圧しているためにニューオーリンズに来てから新聞でエヴァの死を知ることになったフロレンスだったが,

彼女はその後エヴァの夢を引き継いで教師となっており、学校の勉強に落ちこぼれていた自分にエヴァがあの夏教えてくれた、図示化による構文把握“diagramming”を5年生に教えている<sup>(10)</sup>。すると“Lining words up just right so you can see how they make a path to somewhere.”(74)を明らかにする「ダイアグラミング」の力に導かれたかのように、生徒たちに教えている最中に、抑圧していたエヴァの殺害場面が42年ぶりに彼女の目の前に甦る。これはまさに、ヴァン・デア・コークとヴァン・デア・ハートが以下で指摘している「トラウマ記憶」が人格の一部として統合された瞬間といえるだろう。

In the case of complete recovery, the person does not suffer anymore from the reappearance of traumatic memories in the form of flashbacks, behavioral reenactments, and so on. Instead the story can be told, the person can look back at what happened; *he has given it a place in his life history, his autobiography, and thereby in the whole of his personality.* (van der Kolk and van der Hart 176; 強調筆者)

『パルミラの女王』における大人の回想の声は、この時点からのものであり、父によるエヴァ殺害を目撃しながらも、それを証言できずにきた罪の意識を自覚する時点からのものとなっている。白人として人種差別に加担した罪悪感を認めることは、子供の1人称の語りによって描かれていた、一回性の何気ない子供時代へのノスタルジーを否定することにも繋がるが、フローは自分の子供時代を否定することになったとしても、最終的にエヴァを裏切らなかつたといえる。長いあいだ、自らを脅かすものとして受けとめられなかつたにもかかわらず、完全に忘却することなく裏切らなかつた記憶があつたからこそ書かれたのが、『パルミラの女王』という物語だということが明らかになる。

## おわりに

「トラウマ記憶」の「物語記憶」への変換について、『パルミラの女王』の17章から19章の物語構造をいささか詳細に考察したが、この部分は実は小説のごく一部に過ぎず、残りの小説95パーセントにおいてはフロレンスの10歳の日常が臨場感をもって生き生きと描かれている。母と真夜中のドライブをしな

からミルクシェークが溶けていく様子、父に自慢の美しい娘として集会に連れていかれて得意になる様子、母の帰宅を待ち侘びながら夕暮れ時から真夜中近くにかけて通りをひとりゴキブリ退治をして歩く様子、父を必死で守ろうと祖母に頑なに嘘をつく様子など、この小説の魅力はあたりまえの家族の日常を描くこうした細部の描写にこそある。この小説全体が、52歳になったフロレンスによって回想されて語られていることを考えると、これは離れ業ともいえる。というのも、公民権運動の時期を経て、南部の人種隔離政策の矛盾と過ちが鮮明になった時代に、回想する形でそれ以前の自分の子供時代を描くことが孕む困難さがここにはあるからだ。

フロレンスは母の娘でもあり同時に父の娘でもあり、子供時代には父の人種差別意識を呼吸して育った。また、父の注目欲しさに、エヴァが保険の仕事をはじめたことを父に伝えたのもフロレンスだった（Queen 111）。人種差別に加担する加害者側の白人のひとりとしての自らを完全に意識化することなく過ごした子供時代は、公民権後から振り返る時、その無邪気さは偽りを含むものとなり、翳りを帯びざるをえない。それにもかかわらず、ゲインが『パルミラの女王』で挑んでいるのは、子供時代を叙情性を持ったままにあくまでもかけがえのないものとして描きつつ、しかもその子供時代の認識が過ちであったことを悟った大人の視点を維持しながら物語全体を構成するという、ダイナミックな分裂を抱え込み続けることだった。いわば、子供時代に特化した成長物語である『モッキングバードを殺すこと』と、公民権時代に白人のひとりとしての罪悪感を意識化していく物語でもある『さあ、見張りを立てよ』<sup>(11)</sup>、この2作を奇しくも縫り合せた地点にかるうじて成立しているのが『パルミラの女王』だといえるかもしれない。自身の牧歌的な白人少女時代が損なわれるかもしれない、だが黒人によって生まれた自分のアイデンティティは、黒人の側から見た光景を語る責任を放棄することを許さない、人種隔離政策下の南部の子供時代を公民権運動後から語ることは、そんな2重性に耐えることであり、「物語記憶」の中で「トラウマ記憶」と繰り返しつきあい続けることであると、ゲインのこのデビュー作はさしずめ告げているのではないだろうか。

## 《注》

- (1) 『パルミラの女王』と『ヘルプ』への言及は, Gwin, *Remembering* 28, 167-70; Jones 16; Travis; Wilkinson; “Q and A with Minrose Gwin, Author of *The Queen of Palmyra*”に見られる。『パルミラの女王』と『モッキングバードを殺すこと』への言及は, Smithを参照。ゲインは『パルミラの女王』についてのインタビューの中で, あなたの文学への愛を呼び覚まし育んだ小説は何かと聞かれて, “(smiles) I must confess, *To Kill a Mockingbird* was a very important book to me (laughs). Beautiful book.”と答えている (Eason)。
- (2) 『パルミラの女王』には黒人の女子大学生 Eva Greene も登場するが, 彼女は Zenie の姪という設定になっており, 実際に作家ミンローズ・ゲインの身近にいた黒人家政婦エヴァ・リー・ミラーは小説の中ではゼニーに投影されている。
- (3) ベビーシッターだったエヴァ・リー・ミラーとの交流が, エヴァの死まで彼女の家を訪問する形で続いていたことについては, 『パルミラの女王』の巻末に収録されたゲインのインタビューも参照のこと (Gwin, “About” 4-5)。
- (4) 設定年については, ブラウン判決が 1954 年, ブラウン第 2 判決, モントゴメリーのバスボイコット, エメット・ティル殺害事件が 1955 年, ルーシー・オーザリンの入学阻止事件が 1956 年であり, 本稿第 4 節で扱う本小説の出版の経緯からは 1957 年以降とは考えにくいから, 設定年は 1956 年であろうと推定される。
- (5) 「白人市民協議会」については, そのミシシッピ州での活動をめぐって Minrose Gwin の以下の説明がある。“The White Citizens’ Council of Mississippi, the white-collar twin of the KKK founded in 1953 to maintain white supremacy, was supported by the Hederman family network, which controlled both newspapers and owned one of the Jackson television stations. The governor of Mississippi and the mayor of Jackson were members, and Evers’s killer, Byron De La Beckwith of Greenwood, was a charter member.” (*Remembering* 5-6) ただし, 1953 は 1954 の間違いだと思われる。「白人市民協議会」と KKK との関係については, ダニエルも参照 (ダニエル 323-25)。
- (6) 本書で取り上げている作品は多岐にわたるが, 文学としては, ジャクソン在住の Eudora Welty によって暗殺当夜に執筆された短編 “Where Is the Voice Coming From?” (1963) や James Baldwin による戯曲 *Blues for Mister Charlie* (1964) などが論じられている。
- (7) Shields の伝記は, Harper Lee の協力を得られないまま執筆された (Shields 2)。
- (8) Karla Nielsen によると, ハーパー・リーのエージェント Annie Laurie Williams と Maurice Crain による関係文書はコロンビア大学の貴重本コレクションに保存されており, この文書によると, 出版社が原稿を買取った時期は 1957 年 10 月, またその時点でのタイトルは無題となっており, 『アティカス』のタイトルは確認できない。だがいずれにしても, これらの文書によっても, 『さあ, 見張りを立てよ』が『モッキングバードを殺すこと』の “parent” 原稿であることは明らかである (Nielsen)。また, 1960 年出版本と 2015 年出版本に

については、両方に共通するパッセージが複数見られることが指摘されている。それらの重複の一部を示した Keith Collins と Nikhil Sonnad も、執筆の順については 2015 年出版本が 1960 年出版本の “the early first draft” と考えられるとしている (Collins and Sonnad)。

- (9) この沈黙については、自身も南部作家である Doris Betts も指摘している (Betts 139)。Laura Fine も指摘しているが、彼女は大人になったジーン・ルイズのジェンダー面での沈黙に注目している (Fine 67-68)。
- (10) ダイアグラミングとは、一種の樹形構造を用いて構文を把握する方法であり、1877 年に Alonzo Reed と Brainerd Kellogg が著書 *Higher Lessons in English* を出版後、アメリカの学校教育において 60 年間ほど一世を風靡した。1960 年代には批判もされたが、現在でも完全に廃れてはいない (Summers)。“Some-time in the '60s, it nearly came to a dead stop. . . . It's often used in ESL courses, and it's making a small comeback in schools—mostly progressive private ones, but also in public schools here and there around the country.” “Diagramming isn't dead—it's just resting. The practice is in the process of recovering from the steep slide into marginality that began in the 1960s.” (Florey 127, 142) も参照。
- (11) スカウトことジーン・ルイズが自らの白人ならではの偏見に気づいていく物語になっているとして、ヘニングは『さあ、見張りを立てよ』のほうを高く評価している。スカウトの子供時代に焦点を当てるかたちで大幅に書き直されて『モッキングバードを殺すこと』が完成するにあたっては、編集者ホホフの助言が大きかったと言われており、ヘニングはハーパー・リーが不本意ながら助言に従った可能性もあるとしている (Henninger 600, 601, 622)。

#### 引用文献

- Betts, Doris. “The Mockingbird's Throat: A Personal Reflection.” *On Harper Lee: Essays and Reflections*, edited by Alice Hall Petry, U of Tennessee P, 2007, pp. 135-41.
- Collins, Keith, and Nikhil Sonnad. “See Where ‘Go Set a Watchman’ Overlaps with ‘To Kill a Mockingbird,’ Word-for-word.” *Quartz*, 14 July 2015, qz.com/452650/harper-lee-revisions/.
- Eason, Hannah. “Memory and the Queen: An Interview with Author Minrose Gwin.” *Her Circle: A Magazine of Women's Creative Arts and Activism*, 15 May 2010, www.hercircleezine.com/2010/05/15/memory-and-the-queen-an-interview-with-author-minrose-gwin/.
- Fine, Laura. “Structuring the Narrator's Rebellion in *To Kill a Mockingbird*.” *On Harper Lee: Essays and Reflections*, edited by Alice Hall Petry, U of Tennessee P, 2007, pp. 61-77.
- Florey, Kitty Burns. *Sister Bernadette's Barking Dog: The Quirky History and Lost Art of Diagramming Sentences*. Harcourt, 2006.

- Going, William T. "Store and Mockingbird: Two Pulitzer Novels about Alabama." *Harper Lee's To Kill a Mockingbird*, edited by Harold Bloom, Chelsea House, 2007, pp. 47–63.
- Gwin, Minrose. "About the Book: On Writing *The Queen of Palmyra*." *The Queen of Palmyra*, HarperCollins, 2010, pp. 4–9.
- \_\_\_\_\_. *The Queen of Palmyra*. HarperCollins, 2010.
- \_\_\_\_\_. *Remembering Medgar Evers: Writing the Long Civil Rights Movement*. U of Georgia P, 2013.
- \_\_\_\_\_. *Wishing for Snow*. Louisiana State UP, 2004.
- Gwin, Minrose C. *Black and White Women of the Old South: The Peculiar Sisterhood in American Literature*. U of Tennessee P, 1985.
- Heninger, Katherine. "My Childhood Is Ruined!": Harper Lee and Racial Innocence." *American Literature*, vol. 88, no. 3, Sept. 2016, pp. 597–626.
- Jones, Suzanne W. "The Divided Reception of *The Help*." *Southern Cultures*, vol. 20, no. 1, Spring 2014, pp. 7–25.
- Lee, Harper. *Go Set a Watchman*. HarperCollins, 2015.
- \_\_\_\_\_. *To Kill a Mockingbird*. HarperCollins, 2002.
- Moody, Anne. *Coming of Age in Mississippi*. Delta, 2004.
- Nielsen, Karla. "Go Set a Watchman in the Papers of Harper Lee's Literary Agents." *News & Notes from Columbia's Rare Book & Manuscript Library*, 14 July 2015, [blogs.cul.columbia.edu/rbml/2015/07/14/go-set-a-watchman-in-the-papers-of-harper-lees-literary-agents/](https://blogs.cul.columbia.edu/rbml/2015/07/14/go-set-a-watchman-in-the-papers-of-harper-lees-literary-agents/).
- "Q and A with Minrose Gwin, Author of *The Queen of Palmyra*." *A Good Blog Is Hard to Find*, 11 May 2010, [southernauthors.blogspot.jp/2010/05/q-and-with-minrose-gwin-author-of-queen.html](http://southernauthors.blogspot.jp/2010/05/q-and-with-minrose-gwin-author-of-queen.html).
- Shields, Charles J. *Mockingbird: A Portrait of Harper Lee*. Henry Holt, 2006.
- Smith, Lee. "Praise for *The Queen of Palmyra*." *The Queen of Palmyra*, by Minrose Gwin, HarperCollins, 2010. [www.minrosegwin.com/praise.html](http://www.minrosegwin.com/praise.html).
- Stockett, Kathryn. *The Help*. Putnam, 2009.
- \_\_\_\_\_. "Too Little, Too Late—Kathryn Stockett, in Her Own Words." Afterword. *The Help*, Putnam, 2009, pp. 447–51.
- Summers, Juana. "A Picture of Language: The Fading Art of Diagramming Sentences." *NPR*, 22 Aug. 2014, [www.npr.org/sections/ed/2014/08/22/341898975/a-picture-of-language-the-fading-art-of-diagramming-sentences](http://www.npr.org/sections/ed/2014/08/22/341898975/a-picture-of-language-the-fading-art-of-diagramming-sentences).
- Travis, Trysh. "Is *The Help* Realistic? It Depends." *BlackPast*, [www.blackpast.org/perspectives/help-realistic-it-depends](http://www.blackpast.org/perspectives/help-realistic-it-depends). Accessed 10 Aug. 2017.
- van der Kolk, Bessel A., and Onno van der Hart. "The Intrusive Past: The Flexibility of Memory and the Engraving of Trauma." *Trauma: Explorations in Memory*, edited by Cathy Caruth, Johns Hopkins UP, 1995, pp. 158–82.
- Wilkinson, Joanne. "*The Queen of Palmyra*. By Minrose Gwin." *Booklist*, 15 Mar. 2010, p. 22.

ダニエル, ピート. 『失われた革命 — 1950年代のアメリカ南部』, 前田絢子訳, 青土社, 2005.

パターソン, ジェイムズ. 『ブラウン判決の遺産 — アメリカ公民権運動と教育制度の歴史』, 榎岡宏成訳, 慶應義塾大学出版会, 2010.

(アメリカ文学／文学部教授)